第32期理事長のご挨拶

理事長　廣　田　　勇*

このたび改選されました第32期日本気象学会新理事会の決定により，前期から引き続いて理事長の任をつとめることとなりました．重責ではありますが，これまでの経験を生かし最善の努力を続けたいと考えておりますので，会員各位のご支援ご協力のほどをあらためてよろしくお願い申し上げます．理事長代理には学会活動および気象庁業務のご経験豊かな古川武彦理事にお願いしてその任に当っていただくことになりました．また，各種委員会においては，学会運営の経験豊富な理事の諸氏に加え，今期あらたに理事のお仕事を買って出て下さった方々が適材適所でしっかりと役割分担をなさって下さるのでこころ強い限りです．

さて，第31期では，学会運営に関しいくつかの新しい課題が提起されました．特に，学会員の中からお願いした中堅若手メンバーによる評議員会では，すでに昨年の天気6月号に掲載したとおり，積極的かつ建設的なご提言をいただきました．理事会としてはそれを受けた形で当面実行可能な改善策に着手したばかりではなく，長期展望として第32期で真剣に検討すべき諸問題を具体的に明らかにして今年の天気6月号に提示しました．

一方，学会活動と一般社会との接点を象徴するひとつの問題として第30期から継続してきた「気象学会としての地球環境問題の捉え方」の議論も，今年5月の大宮における春季大会での専門分科会で様々な角度からの提言・討論が行われ，会員諸氏の間での相互認識を深めることができました．この継続発展も今後の重要課題のひとつです．

運営改善策として既に実行に移した件案のひとつに，JMSJ（気象集誌）と「天気」の電子ジャーナル化があります．これは時代の要請に応える必然的な成り行きとも言えますが，単なる技術的問題に留まらず，利用者層の拡大と学会員制度との関係という将来における大きな問題をもはらんでいます．論文や記事はすべてインターネットで見ることが出来るから会費を払ってまで雑誌を講読する必要はない，というような事態を招かぬよう，今後とも慎重に推移を見守ってゆく必要があります．

会員数の増加は望ましいことですが，春季秋季大会における研究発表数の増加にどう対応してゆくかもまた大きな宿題です．とりあえずの試みとして，来年から春季大会を4日間に拡大します．これには4日間の最終日を土曜日とすることによってより多くの会員が大会に参加できるようにとの配慮も加味されています．

しかしながら，これまで理事長として様々な機会に繰り返し強調してきたように，学会活動の最大のバックボーンは気象学そのものの質の向上です．学問的に優れた研究成果があってこそはじめて，天気予報等の応用面もより高度に発展するでしょうし，さらに一般社会に対する啓発においても学会として責任の持てる発言が出来ることに繋がります．その意味で，会員数発表数の増加に対する期待には常に質的な裏付けが求められます．これは各分野の指導的立場にある者すべての責務であり，学会自体がたとえば各種の顕彰を通して気象学のあるべき姿を優れた具体例で示してゆくという「学問の自律性」が強く要請されていることを意味するものです．

第32期では，このような理想に少しでも近づくことのできるよう一意専心し努力を続けることをお約束申し上げ理事長就任のご挨拶と致します．

* 京都大学名誉教授．
© 2002　日本気象学会